

石清水八幡宮社殿の祖形について

八幡造の祖形と源流と変遷、其 2

正会員 太田 静 六*

1. 創建時における石清水八幡宮社殿の建築

清和天皇の貞観1年(859)に、宇佐神宮から勧請されて¹⁾、都の南南西に聳える男山の頂上に鎮座された石清水八幡宮は、都に近いという地の利を得て急速に朝廷の尊信をうけ、創立後まもなく賀茂、松尾、春日のような古社と同等の待遇をうけるようになった。平安末期になると白河天皇の殊遇をうけて社格は一段と進み、伊勢と共に二所の宗廟と呼ばれて諸社の上におかれ、本家筋に当る宇佐神宮を越す盛観をもたらしようになった。

石清水八幡宮の社殿については、創建後もない仁和2年(886)の記載が三代実録にみえる。即ち同年5月26日条をみると、

降雨、(中略)山城国石清水八幡大菩薩宮自鳴、如撃鼓声、南楼鳴、如風波相激成声、經数刻而不停

と記されて、当日は降雨であったが石清水八幡宮の南楼門が鳴りだして、数刻に及んでも鳴り止まなかったとある。恐らく雷鳴に共振して自然と鳴り出したものであろうが、已に南楼門の存在していたことが知られる。仁和2年という、石清水八幡宮が創建されてから僅か26年後のことであり、その間に罹災や再建は無論のこと、改修の記録さえみられないので、この記載は創建当時の姿を伝えるものとみてよからう。即ち石清水八幡宮では創建当初から南楼門が営まれたことを示すが、このことは色々の点で重要な意義をもつ。

第一に南楼門をもつことから、石清水宮では創建当初から仏寺建築の楼門形式が導入されたことが知られる。第二に南楼門をもつことから、石清水八幡宮では、創建当時から現在と同じように南を正面とする社殿形式によったことが窺われる。以上の2点は共に創建当初の宇佐宮では未だみられなかった形式で²⁾、石清水八幡宮を創始するに際して、新時代に即した新しい社殿形式がとられたことを示す。

考えてみると神亀2年(725)における宇佐宮第一殿の創建から、石清水八幡宮が勧請された貞観1年(859)までには134年という長い年月が経過している。時代的にみても奈良盛期から平安初期へと進んでいるし、都も平城京から平安京へと遷り、あれ程強く我国に影響を与え

た唐も已に滅亡した後で、いわゆる日本化が着々と進み始めた時に当る。振り返って現在の我国をみても、敗戦で全てを失った昭和20年から、今日の繁栄をみる迄に僅か32年しかたっていないし、チョンマゲ時代の日本人が西洋文化に目覚めた明治1年(1868)から数えても、今日(昭和52年)迄は109年しか経ていない。このように重大な転機に臨むと、素早く反応して絶妙に対処するのが日本民族の特徴である。従って、宇佐宮の創建された奈良時代から、134年以上も経た後で創建された石清水宮の、本質なり、建築なりに、重大な変化が現れても別に不思議はない。新都・平安京への遷都以来、早くも65年をへており、仏寺建築の影響が次第に神社建築に入りこんできた時である。宇佐神宮が創立以来、仏教と特別に関係の深かったことは衆知の通りだが、更に石清水八幡宮の創建事情を知る時は、同八幡宮の建築に仏教的色彩が濃厚に現われるのは当然であろうことが解る。

即ち宇佐神宮から京都の男山に八幡宮を勧請するように努力をした中心人物は南都大安寺の伝燈大法師・行教で、これを全面的に応援したのが太政大臣藤原良房であった。これより早く、行教は宇佐宮に参籠の上、大同2年(807)に大安寺の鎮守として八幡宮を勧請しているので(南都大安寺塔中院縁起)、恐らくはその実績を買われて男山への勧請に乗りだすようになったものであろう。斯様に石清水八幡宮は僧侶が中心となって創建された当初からの宮寺(みやでら)であるため、宇佐宮よりは一段と進んだ神仏習合色の濃厚な性格を保持していた。即ち宇佐宮と違って、八幡宮と神宮寺である護国寺とは最初から一体となるばかりでなく、殆どの要職は創建時に重要な役割を果たした僧行教の系統である紀氏一統により、長期に亘って把握された。そのため全ての組織も僧侶本位であった。正式の呼称にしても三代実録に

(938)天慶元年四月九日庚申、先是、奉幣於伊勢大神宮及石清水八幡大菩薩宮。

(876)貞観十八年八月十三日丁巳、石清水八幡護国寺申牒僞、

と記されるように、石清水八幡大菩薩宮(前掲)とか、石清水八幡護国寺と呼ばれる有様であった。このような状勢下に於て石清水八幡宮の建築に仏教色が強く現れても何の不思議はあるまい。創建当初から南楼門が構えら

* 早稲田大学客員教授

(昭和51年11月24日日本稿受理・討論期限昭和52年10月末日)

れたのもこのためである。

廻廊ないし廊のことは暫く文献にみえないが、南楼門が構えられた以上、少なくともその左右に廊が営まれたであろうことは当然考えられる。楼門の左右に玉垣では格好がつかない。果せるかな、一条天皇の永祚元年条をみると、

永祚元年(989)八月十三日、依大風石清水御殿前東西廊顛倒(宮寺縁事抄仏神事次第)

とみえて、御殿(神殿)前面の東西廊が大風で倒れたことをのべている。先学の谷博士は、ここにみえる東西廊を以て南楼門の東西に連なる南廊と解された末、当時は未だ四面廻廊とまではいかず、南面廊だけが単独に存在しており、そのために大風で倒れたのであろうとされている³⁾。私もこの説には同感で、南楼門と共に南廊だけは営まれたが、他の三面廊は暫くの間いとなまれず、垣であったと考えている。そして永祚1年以降も当分の間は依然として南廊だけであつたらしいことが次の資料により窺われる。即ち石清水八幡宮御修理造営之記に、

長元二年(1029)、御殿北高欄并前後犬防、御幣殿、南楼階日隠等始造之、

と記されるが、これから平安盛期に当る藤原頼通の長元2年に、始めて神殿の北高欄や前後の犬防が設けられた他、幣殿や南楼門前の階段と日隠などもこの時に営まれたことが知られる。それまでは神殿の高欄にしても東西南の三面だけで、背面に当る北高欄は設けられていなか



写真-1 瑞龍、幣殿、舞殿の実状、石清水八幡宮

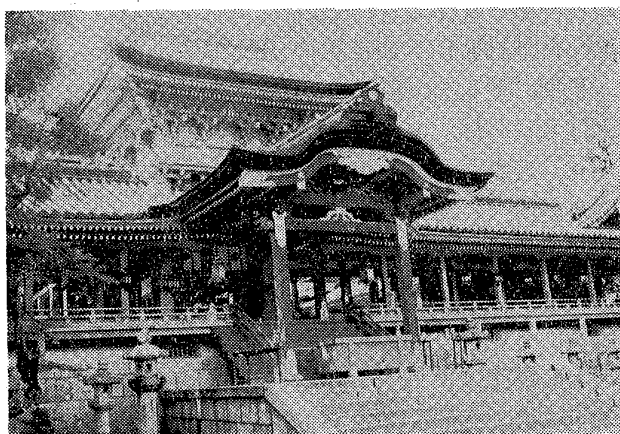


写真-2 南楼門と唐破風、石清水八幡宮、

った。また神殿の前後に犬防も始めて構えられたというが、ここに言う犬防は現在の本殿に接して廻らされている瑞籬(みずがき)の前身と思われ、瑞籬の実状は写真-1に示す通りである。当初の犬防はより簡素なものであつたろうが、犬防という文字通り、犬の侵入を防ぐ垣であったことに間違いはあるまい。

もし四面廻廊が整備されていれば犬など入りこめる余地はなく、従って犬防などを改めて営む必要もない。ところが長元2年に始めて犬防を設けたということは、それ迄は本殿にまで犬が入りこんできて、糞や小便をしたり、汚物をくわえこんだりして困ること、換言すると廻廊が未だ四面にまで及んでいなかったことを示すものであろう。高欄のように簡単なものでさえ、人目につかない北高欄は長元2年までは設けられなかったのだから、高欄より遥かに手のかかる廻廊が全周に及ばなかったとしても不思議はない。

なお、南楼門前の階や日隠もこの時始めて付けられたとみえるが、その実情は写真-2に示す通りで、日隠は写真の中央にみえる唐破風がこれに当る。現在の日隠はその後の造替に際して桃山風に改修されており、当初のそれは斯様に華麗なものではなく、片流れの簡素なものであったことが鎌倉時代に描かれた一遍聖絵や春日権現霊現記中にみえる石清水宮の南楼門から知られる。

関白頼通は文化や芸術に深い理解があり、自分の邸宅である高陽院築造の際には自ら指揮した程であるから、神社仏閣に対しても好意的であった。そのためか、長期間に亘り南廊だけであつた石清水宮の廊も、頼通の晩年には四面廻廊が整備したとみえて、宮寺縁事抄の康平1年(1058)における石清水宮の中に、

自西廊脇門入廊内と記される。即ち西廊の脇門より廊内に入るといふのだが、これにより当時は南廊だけでなく東西廊までが完備したことが窺える。このあと平安末期の保延6年(1140)1月に石清水宮は第1回目の罹災をうけるが、同年中に再建された第2次石清水八幡宮は、最初から四面廻廊を完備していたことは当然で、石清水宮縁事抄にも東西各々三十五間の廻廊と明記される。

上述するところにより石清水八幡宮の建築が、新意慾の下に始めて仏教的要素である南楼門や廻廊形式を導入して、宇佐宮ではみられなかった南正面の体形を打ちだしてきたこと、そのために本殿形式にも大きな影響を及ぼして、創建宇佐宮でとられた妻入り正面の制とは別に、平入り南正面の新形式がとられた。このようにして南楼門を以て正面とする石清水八幡宮の新体制による結構は完成していったが、南正面とする石清水宮の方が宇佐宮における妻入り西正面ないし東正面とするものより、一般の参拝者を対象とした場合の神社形式として、優れた外観をもつことは言う迄もない。

石清水八幡宮が当初から南正面の新形式に拠ろうとし

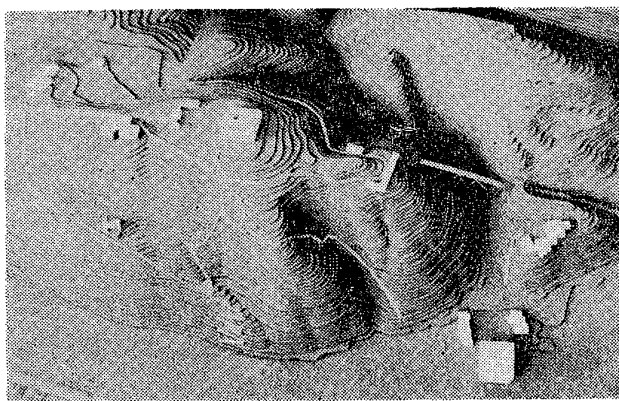


写真-3 石清水八幡宮敷地の地勢模型

たことは、社殿の立つ地勢をみても領かれる。即ち宇佐神宮社殿の敷地が東西に長く、南北に短小であるのに加えて南面が直ちに急斜面となるため、南正面とするよりは西正面とする方が適しているのとは全く逆に、石清水宮の敷地は東西に短い代りに南北に長く、殊に南面が開けているので、最初から南正面の敷地としての条件を十分に備えていた。写真-3 は石清水八幡宮の鎮座する男山の地勢模型だが、山上の中央にみえる矩形型が本殿関係で、その左方（南方）に広がるのが南参道であり、曾ては馬場としても用いられた。

斯様にして石清水八幡宮により、楼門・廻廊を備えた南正面の新形式が開発されると、その華麗さに多くの人々が賛嘆の声をあげたことであろう。同時に今迄の簡素で白木造の神社建築に見慣れてきた人々は、一転して深紅色に輝く丹土塗の新社殿をみた時に、目を見張って

驚いたに違いない。その結果、本家筋に当る宇佐宮でも早速この制を取り入れたことは別稿で述べてきたが²⁾、他の八幡宮に於ても同じであることは、薬師寺の鎮守として祀られた薬師八幡宮の例をみても領かれる。即ち寛平8年に創建された同寺の鎮守八幡宮について、薬師寺古記に、

鎮守八幡宮三社廻廊楼門

と記されることから、ここでも廻廊・楼門をもつ新形式がとられたことが解る。寛平8年(896)という石清水八幡宮が創建された貞観1年より僅か37年しか経っていないのをみても、いかにこの新形式が急速に流行したかが窺われよう。

このようにして南正面とする南楼・廻廊形式は石清水八幡宮において創建されたが、一方、宇佐神宮創建以来の正面として伝統をもつ妻入り面の樋下之間に対しては、石清水八幡宮にあっても準正面として引き続きこれを尊重した。現存する東参道口がこれで、鎌倉時代に描

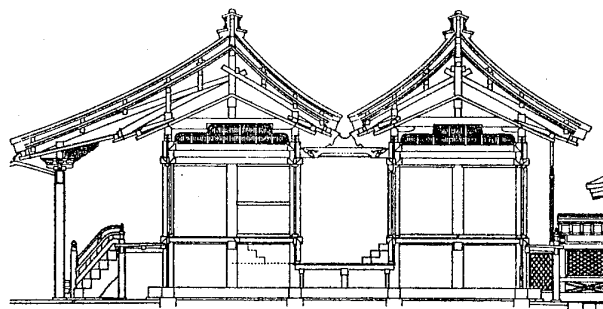


図-1 石清水八幡宮本殿断面図

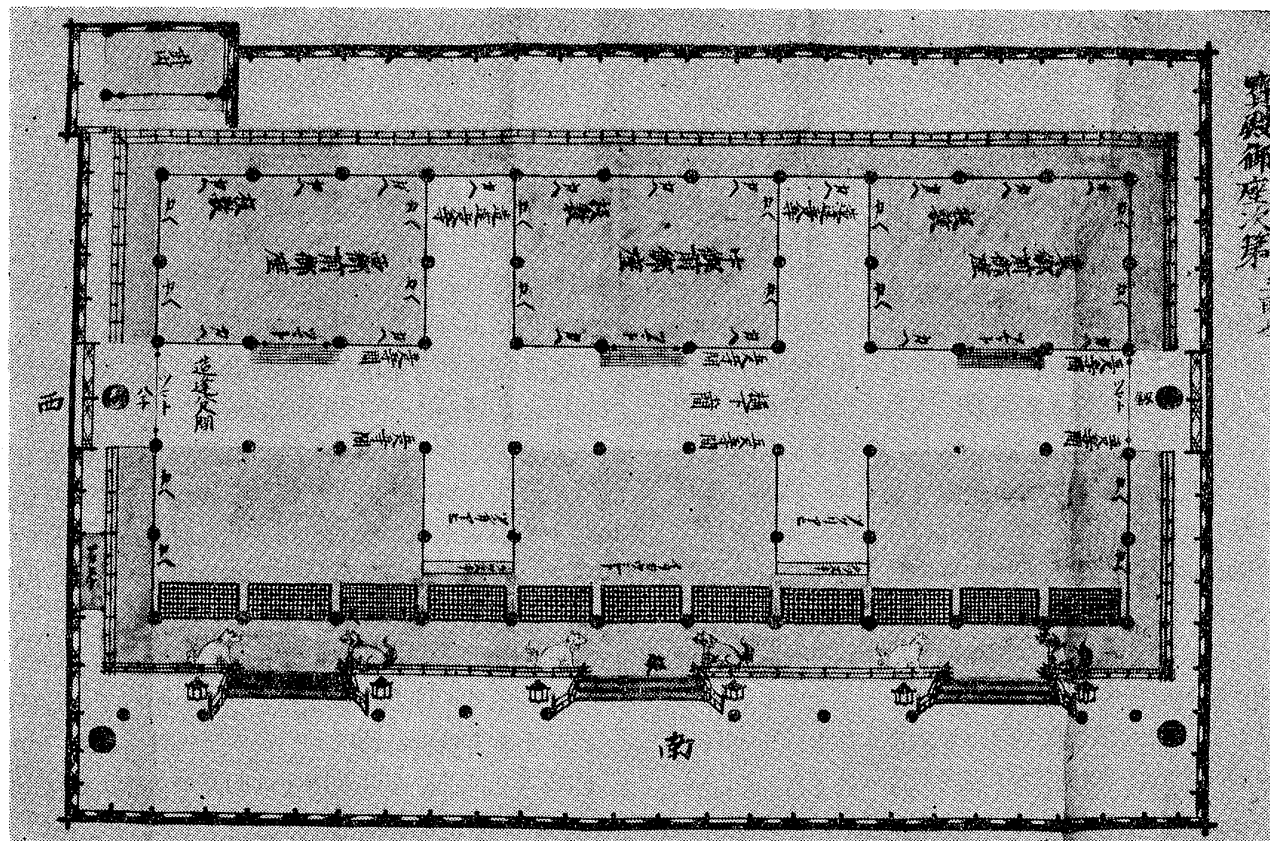


図-2 石清水八幡宮本殿古図 建久6年以前ないし平安末、宇佐宮所蔵（模写）

かれた一遍聖絵中にみえる石清水八幡宮をみると、東参道には多宝塔・鐘楼・鳥居などが配されて大変繁昌していたことが窺える。

2. 石清水八幡宮本殿にみる床高の問題

石清水八幡宮本殿床高の現状は 図一1 に示す断面図をみれば解る通り、内殿と外殿とは同高だが（正確にいうと内殿の方が一長押だけ高い由）、両殿の中間にある樋下之間は両殿より可成低く床が設けられている。だが、現状のそれが創建以来の姿でないことは明らかで、鎌倉時代初期に当る建久6年における状態は、八幡宮縁事抄に

建久六年（1195）七月十九日、内外殿間板敷被敷之、本無之、と記される通りで、建久6年7月の本殿修理に際し、始めて内外両殿の間を板敷としたとみえることから、それ迄は板敷でなく土間であったことが解る。この文献は 図一2 に示す古図と共に谷重雄博士により始めて紹介されたものだが³⁾、八幡造の祖形を探る上で重要な役割をなす。図一2 に示す指図には年号を欠くが、樋下土間と記入される所から、少くとも建久6年以前に描かれたものであることが、前記文献を参照することにより立証される。そして従来は単に建久6年以前の指図として紹介されてきたが、石清水神宮庁の話では、同指図を検討した古文書学の専門家によると、その紙質や筆跡からみて平安末期頃まで遡るであろうとのことである。その通りだとすると、その価値は一段と高くなる。指図をみると、内外殿の平面その他は現状と殆ど変らないが、土間の部分が大変広いことに気付く。現在はこれらの部分を含めて床は全面的に張られているのだが、建久6年迄は内外殿間（樋下之間）から各社殿間（造合）までが土間となっていた。従って現在は床上に設けられた樋下の出入口扉も、それ迄は直接土間に設けられていた。

更に大事なことは 図一2 の指図から前殿・後殿の床高が比較される点である。指図をみると後殿の正面には可成急勾配の階段が設けられており、段数も多く、6段に及ぶ。因に現社殿は前後殿とも床高は殆ど同じで、前殿の階段は5段であり、指図のそれより1段少ない。これからみても 図一2 にみえる後殿の床高は現在の床高と同じか、それより高かったであろうことが解る。これに対し、図一2 に於て前殿に昇る状態をみると、内側の造合之間に僅か1段の沓脱が設けられているのに過ぎない。この指図には前殿の南階も描かれており、そこから昇殿されるが、その木階は勾配も緩く、段数も僅か2段しかなく、現在の5段に較べると遥かに少なく低い。即ち後殿に較べて前殿の床高は可成低いことを示すが、指図に描かれる階段と沓脱などから類推すると、前殿の床高は後殿のそれに対して1/3程度の低い床であったことが窺える。

同じく神座をもつ同一神の神殿でありながら、前殿と

後殿との床高が著しく相違するという事実は注意すべきである。最初から同格の神殿として前・後殿を営む場合には、当然、前後殿とも同じ床高にするのが普通である。また多少の性格的な相異がある場合でも、本例のように極端な差異をつけることは一寸考えられない。ところが石清水の場合は、少差どころか格段の差が最初からつけられている以上、そこに何等かの特別の理由なり、事情がなければならぬ。この前殿の床高が後殿のそれに較べて極めて低いという特別な理由を私は、前後殿とも同じ神殿とはいふものの、前殿の方が後殿に較べて大分格が低く、前殿の前身は全く床のない土間だけの建物であったと考えている。そして八幡造の源流を現在、定説とされる仏寺建築の細殿などからではなく、宇佐宮の鎮座する九州地方の民家、即ち私の言う平行型・二棟造に求めようとするものである。この平行型・二棟造の民家なり、八幡造の源流については引き続き稿を改めて述べる。所で民家の場合には土間でよかった前殿、即ち釜屋も神座がおかれて神殿となると、いくら何でも余りに恐れ多いところから、低く床を張るようになったものと思う。この当初は土間であったという古い伝統が、平安末期から鎌倉初期頃まで残っていたわけで、図一2 の指図に描かれた階段なり、沓脱からこれらのことが立証される点に重要な意義がある。

3. 八幡造は石清水八幡宮から始まるのではないかとされる谷博士説に対する疑問

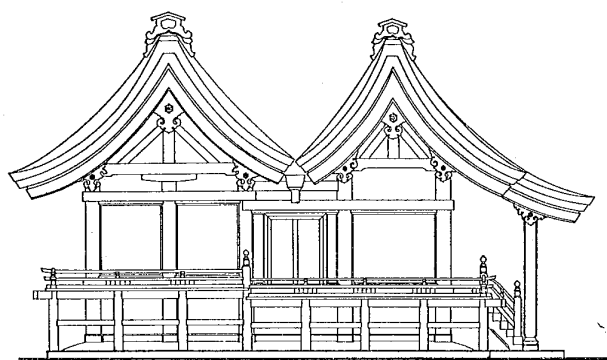
神社建築の先学であられる谷重雄博士は「石清水八幡宮社殿³⁾」なる論考中において、いわゆる八幡造の起源などについてもふれられている。その中で同氏は、いわゆる八幡造の制をとった最初の神殿は宇佐神宮ではなく、石清水八幡宮ではないかという新説をだされている。従来の定説では、八幡造は宇佐神宮から創められ、次いで貞観1年に宇佐宮から石清水八幡宮に勧請されたので、石清水八幡宮にも八幡造が行われるようになったとされていた。この従來說に対して谷博士は疑を抱かれたわけで、上記論考中で次の如く述べられている。

しかし宇佐神宮本殿の形式が当時果して完全な八幡造であったか否かについては確信が持てない。

とされて宇佐神宮起源説を疑われたあと、石清水宮の方は当初から八幡造であったことが言えるので、八幡造は石清水宮から創められ、そのあとで逆に石清水宮から宇佐宮に伝わったのではないかとされている³⁾。その理由としては、

現社殿では樋下の造合を御相之間と呼ぶが、他の造合と共に内外殿床よりかなり低く床を張っているのは古式を示すもので、此の点現在の宇佐神宮本殿のそれは内殿よりは低い外殿床とは同高であるから、かなり古制に遠い感がある。

と述べられて八幡造も古制を今日までよく伝えている石



図一3 宇佐神宮本殿西立面図

清水八幡宮から始まったのではないかとされる。谷博士がこのような新説をだされたのは言う迄もなく建久6年以前には、樋之間が土間であったことから出発されている。確かに谷氏説にも一理はあるが、谷氏は樋之間が建久6年以前は土間であった点だけを捉えて言々されており、同じように重要な内外両殿における床高の相違については全く無視されている。即ち前項で述べたように、図一2に示す建久6年以前で、恐らくは平安末期に描かれたと思われる石清水八幡宮の指図から、前殿と後殿とでは床高に大差があり、後殿に対する前殿の床高は1/3位しかなかったことに気付かれれば、このような新説は出なかったことと思う。現在の石清水宮では前後殿の床高が同一高さなのに、宇佐宮では後殿より前殿の床高が低いことは衆知の通りである。図一3に示す宇佐宮立面図をみても、後殿に較べて前殿および樋下之間が一段低いことが窺われる。即ち樋下だけでなく、前殿もまた後殿より床が低いことは、樋下土間の古制に加えて、石清水宮では已に失われた別の古制、即ち外殿の床は内殿の夫より大変低かったという伝統を今日まで伝えていることになるので、宇佐宮の方が石清水宮よりも一層よく古制を伝えていることになる。この点だけでも谷博士が抱かれるような、八幡造は石清水宮から創まったのではないとする説は成立しない。

次に八幡造の成立が従来説のように仏教建築の影響によるものであろうとする点は谷氏も同じだが、同じ仏教建築の影響でも同氏の場合は、前記の玉稿中で、

一方また境内の護国寺或は極楽寺等の平面より思合せて天台宗建築の匂い濃い事も考慮に入れらるべき事柄であろうか。

と言われる通り、断定こそしないが八幡造の形式が従来から言われている奈良時代の寺院建築からではなく、石清水八幡宮の境内に神宮寺として存在する護国寺や極楽寺の影響をうけて平安時代に成立したのではあるまいかとされている。

さて、創建当初における護国寺平面は不明だが、平安末頃と思われる護国寺平面や極楽寺の場合をみると、共に本堂と礼堂とからなるものの八幡造のそれとは可成相

違して八幡造との直接的な関係はみられない。殊に極楽寺の創建は石清水八幡宮のそれより遅れるらしいので、極楽寺からの影響は一寸考えられない。谷博士がこのような天台宗建築説をだされた理由は、八幡造の創建を奈良時代の宇佐宮ではなく、平安時代の石清水宮からではないかとされた結果、無理に天台宗建築にその源流を求めようとしたためではないと思われる。

上述した所で、八幡造が石清水宮から始められたのではないかとされる谷博士説の誤りであることが立証されたと思うが、更にこのことを確定的なものとする有力な資料が元享釈書、巻十、釈行教の条中にみられる。即ち貞観1年に行教が宇佐八幡神祠に詣って参籠の末、夢に靈感を得て王城（平安京）に八幡宮を勧請することとなり、愈々京に帰るべく山崎まで来たところ、再び夢に八幡宮が現れて、社地を男山に定めるようにとの靈感を得た。そこで行教は以上のことを朝廷に表奏したところ、

帝詔橘工部、准宇佐祠規建新宮、

と記される如く、天皇は橘工部に詔して宇佐祠の規、即ち宇佐八幡宮の規に准じて新宮（石清水宮）を建立させたとみえる。これから新造された石清水宮本殿の建築形態は宇佐宮の規に従って建立されたことが分る。

一方、石清水宮の本殿形式が創建当初から八幡造であることは私も谷博士も共に認める所であるし、他に異論のあることをきかない。だとすると、上記文献から逆に、宇佐宮本殿もまた八幡造であることが立証されることになる。宇佐宮本殿が当初から八幡造であったであろうことは一般には認められていたものの、その確実な立証は今迄何人もなし得なかった。その意味で上記文献は、簡単ではあるが八幡造の形式が宇佐宮本殿から創まることを立証する資料として重要な意義を持つ。

4. 連棟式社殿の成立時期

宇佐宮本殿が東西に孤立して並ぶ3組の同一平面・同一形式の神殿からなるのに対し、石清水八幡宮では同じく3組の神殿からなりながら、3組の屋根が互に連続するため、その外観は前殿の棟を連ねた1棟と、後殿の棟を連ねた1棟との計2棟から成立した格好になる。この前殿・後殿からなる細長い2棟も、実際には互に屋根や床で結ばれているため、正式に言えば2棟ではなく1軒の建築である。

さて、現在の石清水八幡宮本殿でみられるような、いわゆる連棟式社殿が当初からのものでなく、当初のそれは宇佐宮本殿でみられるように棟を別にした3組の神殿であったことは、宇佐祠の規に準じて新造したという前記文献により明らかである。

一方、石清水宮において東西に並ぶ3殿の間隔が、延久3年（1071）時には現在の5尺5寸よりは広く、少なくとも御神体の座る浜床の幅である6尺7寸以上はあったであろうことを、土田充義君は文献上から立証されて

いる⁴⁾。この部分は土田君が学会誌上で発表された八幡宮関係の論考 8 編を通じて、唯一の評価しうる考証のように思われる。さて延久 3 年(1191)という、石清水宮が、貞観 1 年(859)に創建されてから最初の祝融をうけた保延 6 年(1140)に至る迄の丁度中間に当るので、これから創建時における石清水宮の三社殿の間隔もまた現在の 5 尺 5 寸よりは広く、少なくとも 6 尺 7 寸以上あったことが判明する。だが柱真の 6 尺 7 寸では、6 尺 7 寸幅の浜床は安置されないで、実際には 8 尺以上はあったのであろう。この事実を六字宝殿ないし御殿六字の記載や三社殿における破風板の現存などと併せ考える時は、石清水宮もまた三社殿が独立した宇佐神宮の形式によっていたであろうことが一層裏書されよう。因に石清水宮現社殿の柱間寸尺は桁行・梁間とも 5 尺 5 寸間隔で、三社殿間の距離もまた 5 尺 5 寸であり、ただ樋下之間だけが 8 尺 6 寸となり広い。

さて石清水宮の創建社殿が保延 6 年(1140)1 月 23 日に罹災したあと、社殿の再建は直ちに着工されて同年 4 月 2 日には早くも正遷宮の運びとなった。全く超スピードの再建だが、このようにして再建された新社殿は、その後何回かに亘る修理や改修をうけて 200 年近くをへたあと、南北朝時代の建武 5 年(1338)に再び祝融をうける。丁度、足利尊氏の時代である。この間における社殿の実状は、幸にして伝えられる前掲指図(図-2)や一遍上人絵殿中に描かれる石清水八幡宮社殿などにより可成具体的に知ることが出来る。世に一遍上人絵伝と呼ばれる絵巻物は十指を超える程だが、最も年代的に遡るものは京都の歓喜光寺に伝わる正安元年(1299)在銘の 12 巻本で、これは一遍の没後 10 年目に描かれたものである。即ち保延 6 年の再建社殿が建武 5 年に罹災する 39 年前に当るので、そこにみえる石清水八幡宮の社殿から、罹災前 39 年頃の姿を如実に窺うことが出来る。これをみると明らかに連棟式社殿として描かれている。

次に図-2 に掲げた指図が、少なくとも建久 6 年(1195)以前で、恐らくは平安末まで遡るであろうことは前に述べた。建久 6 年としても保延年 6 における再建後わずか 56 年しかたたないが、実際には石清水宮が再建された平安末まで遡るらしいので、この指図から再建当初の実情が推定される。樋下之間や社殿間の造合が土

間であったことは前述の通りだが、更に注意すると三社殿の前殿および後殿は早くも周縁により連結されていることに気付く。殊に前殿の連結部には前殿の場合と同様に葺格子までが描かれている。これらのことから、この指図が描かれたと思われる平安末期ないし、建久 6 年以前には、已に連棟式社殿であったことが立証される。即ち保延 6 年に再建された石清水八幡宮の社殿は当初から連棟式であったことが窺われる。

ここで改めて図-2 に示す指図をみると、造違五尺五寸と記される所から、早くも創建当初の社殿間々隔より狭くなって現在のそれと同一であることが解る。柱間や社殿間隔のようなものは、一般に途中の修理などでは変更出来ないものであるから、図-2 にみえる柱間や社殿間隔を以て、保延 6 年における再建当時のそれと同じだとしても差支えない。即ち保延再建社殿の間隔は貞観創建社殿の間隔より狭められたわけだが、社殿間隔の広がった創建社殿においても、各社殿間の切妻屋根は互にその破風板を接するか、接する程に密着していたであろうことは、宇佐神宮の実情をみればわかる。現在の宇佐神宮社殿間隔は 13 尺 6 寸以上もあって石清水八幡宮のそれより可成広いが、それでも各社殿の屋根は図-4 にみられる如く、互に接近して密着寸前の状態である。これらの実情から考えると、石清水八幡宮が連棟式社殿になったのは保延 6 年における再建社殿の時からで、それは今迄でも相接近していた三社殿の破風が、再建に際して社殿間隔を 2 尺 5 寸前後も短縮させた結果、終に連結していわゆる連棟社殿を生じるに至ったのであろう。

三社殿間の寸尺を神殿柱間と同じの 5 尺 5 寸に狭めた理由としては、社殿の立つ地形が東西に余裕がないこともあげられよう。その他には、正面の柱間を統一することにより、整然とした造詣美を発揮させようとしたこともあると思う。三社殿が独立している時は、その社殿間隔が柱間寸尺と違っていても余り問題にならないが、連棟式になると単独社殿の場合より 4 倍近くの長大な社殿となるので、全体の柱間間隔を統一しないと均整美が損なわれる。このことは図-2 に示された 11 枚の葺格子が整然と並ぶ様子をみても窺えよう。実例に照しても、例えば京都の三十三間堂(蓮華王院本堂)は全桁行 35 間のうち、正面出入口附近の 3 間を除いた 32 間は何れ

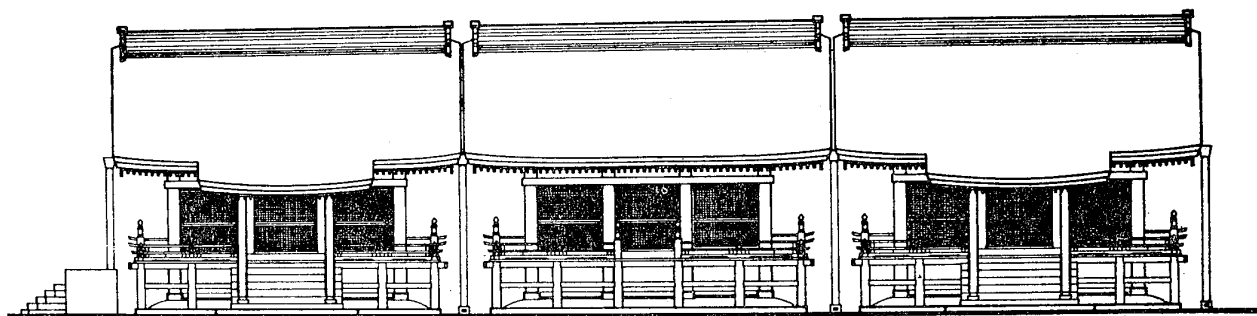


図-4 宇佐神宮本殿南立面図

も等間隔としており、その結果あの美しい均整美が生れたことから肯定されよう。

さて石清水宮が連棟式になったのは保延6年に行われた再建社殿の時からであろうことを述べてきたが、再建された本殿以下の記載は石清水宮縁事抄に可成詳しくみえる。その中で3組の社殿のことを宝殿六宇とのべているので、一見すると連棟社殿ではなく、3組の相離れた宇佐宮式の社殿を想わせる。だがこれは、同じ連棟社殿でも現社殿にみられるように、3組の社殿が同一床面により緊結されて一体化しているのと違い、当時は各社殿間は無論のこと、前後殿の間でさえ土間のままであった(図-2 参照)。図-2 に示す指図を一見すると誰もが六宇の建物を想起するのと同じ状態にあったので、たとい連棟式になっても、これを六宇宝殿と称したまでのことである。

5. む す び

先ず現在の石清水八幡宮や宇佐神宮でみられるように、楼門を南正面に構えて廻廊を廻らすという仏寺建築の要素を巧みに取り入れた新形式は、石清水八幡宮が男山の地に勧請された時から始まるが、そのようになった背景には次のような大きな理由が考えられる。その第一は石清水八幡宮の創建を推進してきた中心人物が僧侶の行教で、当初から宇佐宮より一層神仏習合色の強い宮寺であったこと。第二は、当初から僧侶である行教の紀氏一派が要職を占めて全体の主導権を握るという特殊な事情にあったこと。第三は石清水宮が創建された時、及びそれ以降は丁度、神仏習合が着々と進行するという時代の潮流下におかれており、その潮流に手際よく便乗した点にある。また南正面形式がとられると、本殿もつれて創建宇佐宮でみられたような妻入り正面から、平入り南正面へと移行するが、これらのことは創建当初から考えられていたとみえて、宇佐宮の敷地とは逆に、石清水宮では南正面とするに相応しい現在地が選ばれている。このようにして、白木造からなる従来の簡素な神社建築とは対蹠的な、丹土塗で新機軸の構成からなる華麗な石清

水八幡宮の新結構は完成した。考えてみると、平安初期は無論のこと、平安全期を通じて、このように美しい楼門・廻廊形式からなる仏寺建築は反って今日に見られない。この点から考えても石清水宮が開いた新形式は、神社建築史上、ないし歴史上において大きな意義を持つ。

次に建久6年以前で、恐らくは平安末に描かれたであろう指図から、従来は全く気付かれなかった前・後殿における床高が著しく相違する点を指摘し、前殿の床が後殿のそれに較べて著しく低いのは、前殿が曾ては土間であったことを物語るのではないかという新説をのべたが、これについての詳細は別稿に譲るとした。

また、いわゆる八幡造の創始が従来から定説として扱われてきた宇佐宮起源説に疑をもたれて、新しく石清水宮起源説を唱えられた谷重雄博士説に対して批判を加えた末、谷氏説は成立し難く、やはり宇佐宮に創まることを、前後殿における床高の相違や、石清水宮本殿の規模は宇佐宮に准じて建てられたという新文献の提供により、これを決定的なものとしたばかりでなく、この記載から逆に宇佐宮本殿が当初から八幡造であることを立証することが出来た。そして最後には、石清水八幡宮でみられる連棟式社殿の成立時期を検討した末、保延6年における第1回の罹災後、直ちに再建された保延6年再建の社殿以来の新形式であろうことを述べた。最後に先輩・同輩の玉稿に対して、勝手な批判を加えた非礼に対して御詫びすると共に、御寛恕を乞う次第である。

注

- 1) 元享釋書、石清水遷座縁起、同略縁起などでは石清水八幡宮の遷座を貞観1年としており、類聚国史などでは貞観2年としているが、何れにせよ僅か1年の差で大したことはない。もし、これを貞観1年に着工して、貞観2年に完工したと考えれば、両方が成立して都合がよい。
- 2) 拙稿、宇佐神宮社殿の祖形について、(八幡造の祖形と源流と変遷、其1) 学会論文報告集、252号、昭52年2月。
- 3) 谷 重雄、石清水八幡宮社殿、建築史、1巻2・3号、昭14年3・5月。
- 4) 土田充義、石清水八幡宮本殿について、学会論文報告集、201号、昭47年11月。

SYNOPSIS

U.D.C. 725.139.52(I)

A STUDY ON THE ORIGINAL FORM OF IWASHIMIZU SHRINE

by SEIROKU OTA, Guest Prof. of Waseda Univ. Member of A.I.J.

The southern front style of Hachiman shrine was completed at the 1st time structure of Iwashimizu shrine and the connected roof style of three shrines was started at the second time structure of Iwashimizu shrine. Next I discovered that the floor level of the front temple are very lower than the behind temple in Heian and Kamakura Period.